

上田市文化財調査報告書 第21集

# 東之手・西之手遺跡

創設の信濃国府跡推定地第1次発掘調査概報

1983年3月



上田市教育委員会

## 序

長野県に置かれた最初の官衙である信濃國府については、文献上平安時代の『後名類聚鈔』に、「信濃國府は筑摩郡に在り」と記載されているのみであり、それ以前の小県郡に置かれていたとみられる時代の國府については不明な点が多く、さまざまな学説が提起され、研究され続けてきました。

戰前に刊行された史書、『小県郡史』、『上田市史』においては、信濃國府は市内常田の現在の信州大学織維学部附近に所在していたとの学説が展開されています。

ところが、昭和47年に国庫補助を受けて行なった神科台地の条里的遺構調査によって、新たに神科台地の字東之手、字西之手の方六町の地域に信濃國府跡が推定されました。これは一志茂樹博士を中心に行なわれた綿密な調査研究により、初めて明らかにされたものであります。

しかし近年、推定地周辺が急速に開発の波に洗われはじめ、國府跡の早急な確認調査が強く望まれるようになりました。このため上田市教育委員会は、昭和57年度の国庫補助事業として、信濃國府跡の確認調査を実施することに決定しました。

調査は信濃國府跡確認調査会に調査事業が委託されて実施されました。その結果は、南大門跡と推定される地点からの土師器片や須恵器片の出土、住居跡や柱穴、溝状遺構の検出等発掘調査としては多大な成果を収めることができました。が、残念ながら奈良国立文化財研究所の山中先生がご指摘されたように、國府の建物跡と確認する迄には至りませんでした。

発掘調査は11月中旬から12月の初旬にかけての、寒さがより厳しさを増す時期に行なわれましたが、無事終了することができました。このたびの調査にご尽力戴いた高野会長をはじめとする信濃國府跡確認調査会及び発掘調査団の諸先生方、調査にご協力をお願いした地元の自治会の皆さん、並びに調査に際してご指導を賜わった国、県の先生方に衷心より厚く感謝申し上げる次第であります。

昭和58年3月

上田市教育長 滝沢 石

## 例　　言

1. 本書は昭和57年11月15日から12月4日にわたり実施された、創置の信濃国府跡と推定される上田市大字古里字東之手及び字西之手地籍の第1次発掘調査概報である。
2. 発掘調査は、国費ならびに県費の補助の交付をうけ上田市教育委員会が実施した。
3. 本書はあくまで中間的な報告であるから、結論的な記述はつとめて避けた。これらは、後日第2次以降の調査が実施された時点で訂正補充する所存である。
4. 本書の執筆は次のとおり担当した。

第1章 第1節 遠藤 恵三

第2章、第3章、第5章 五十嵐 幹雄

第4章 川上 元

第1章 第2節・第3節 事務局

5. 遺物の整理及び実測作業は、堀田雄二、宮原祥子、小林真寿、尾見智志、塩崎幸夫が担当した。
6. 本書の編集は川上 元が上田市教育委員会事務局と連絡をとりながら担当した。
7. 出土遺物は、上田市教育委員会が一括保存し、信濃國分寺資料館で管理・保管している。

# 目 次

序

例 言

第 1 章	調 査	1
第 1 節	調査に至る経過	1
第 2 節	調査の経過	2
第 3 節	調査会・調査団の構成	4
第 2 章	環 境	6
第 1 節	自然的環境	6
第 2 節	歴史的(考古学的)環境	6
第 3 章	遺 構	9
第 1 節	発掘地点の設定	9
第 2 節	発掘地点の地学的考察	10
第 3 節	検出遺構	11
	A 地区について	11
	B 地区について	16
第 4 章	遺 物	22
第 1 節	溝状遺構出土の遺物	22
第 2 節	柱穴状遺構出土の遺物	24
第 3 節	堅穴住居址出土の遺物	25
第 5 章	概 括	33

# 第1章 調査

## 第1節 調査に至る経過

### 発掘調査実施決定まで

信濃国府が現在の松本に移る以前は、小県郡（上田を含む）に在ったとするのは、國分寺の所在その他から定説となっていたが、その位置は未だに確認されていないのである。上田市史の執筆者藤沢直枝氏は、大正時代に現在の信州大学総合学部を中心とする地を想定、有力な候補地とされて来たが、昭和四十年代からの農業構造改善政策による圃場整備事業は、水田の形態を一変させる結果となるので、県下でも広い条里式水田地帯をもつ上田市は、この遺構を記録保存するため、国・県の協力を得て昭和47年度から50年度に亘って「上田市の条里遺構調査」を実施した。

この調査に当たって特徴ある小字地名の区域が、神科台地の野竹と西野竹の間の六丁四方の地域に発見され、かねてから「こうの台」「うまや尻」等の国府の存在を思わせる地名が近くにあることに注目していた、調査委員長一志茂樹博士は条里遺構調査完了後、高野豊文、小穴喜一、滝沢泰男等の研究者を動員して、さらに詳しい調査を行った結果、この地域を「創置の信濃國府跡」と推定し、地方史研究誌『信濃』に発表された。



第1図 国府推定地付近の地名（滝沢泰男氏作図）

### 土地開発ブームと確認発掘調査

一方道路の開さく、宅地開発が急速に進み、国府跡推定地の真中を東西に「浅間山麓広域農道」が開かれ、沿道に住宅・事業所などが建ちはじめたため、文化財の保護と活用に深い関係をもつ社団法人長野県文化財保護協会と長野県考古学会は、連名で長野県知事・議会議長・教育委員会に対し確認発掘調査の実施を陳情、一方上小郷土研究会・上小考古学研究会・東信史学会は、連名で上田市長・議会議長・市教育委員会に対して、同様趣旨の陳情を行ない、調査実施の促進を計った。

これらの陳情に対しては、上田市教育委員会事務局も先頭に立って予算の獲得に努め、57年度予算で270万円の計上を見るに至った。

### 確認調査委員会の発足

予算が決定するや上田市教育委員会は、文化財調査委員会を中心として、陳情各種団体の代表者および神科地区の全自治会長を網羅して発掘調査会を結成し、発掘実施態勢を整えて発掘調査に備えた。

### 発掘調査地点の選定

6町四方の推定地のどこを発掘するのが目的達成上最も有効かはむずかしい問題であった。普通は中央線上にある国衙庁の建物の位置を推定し、その地点から発掘するのが常道であるが、ここではその推定地点の中心に約150cmの段差があるため、現地協議の結果一志博士の推定による中央南限地点を発掘して、南門・中央道の発見を目指すこととした。

## 第2節 調査の経過

昭和47年、国庫補助事業として実施された上田市神科地区の条里的追構調査によって、新たに信濃國府跡の創置の問題が提起された。これは一志茂樹博士を中心にして、綿密・周到に調査研究された成果であり、上田市大字古里字東之手、字西之手地籍の方六町の地域に、信濃國府跡が推定された。

ところが、この信濃國府跡推定地は、その真中を東西に広域農道が横切り、さらに近年住宅、商店、事業所等の建設が目立ちはじめるに至った。このため、上田市教育委員会は、昭和57年度に国、県の補助を受けて総事業費270万円の予算で、早急に信濃國府跡の確認調査を実施することに決定した。

調査は信濃國府跡確認調査会（会長高野豊文氏、副会長遠藤憲三氏）及び信濃國府跡確認調査団（団長五十嵐幹雄氏）を編成して行なわれた。昭和57年9月1日付で、上田市長と高野会長との間に、信濃國府跡確認調査にかかる事業委託契約書が取り交わされた。

一方、現場での国府跡確認の発掘調査に先立って、地元自治会関係者や地権者に対する説明会が、9月13日上野ヶ丘公民館に於て行なわれた。

次いで9月27日、国府跡確認調査会や地権者、地元自治会関係者が、栃木県の下野国府跡の発掘調査現場を視察した。現場では栃木県教育委員会の担当職員から国府跡の発掘調査について詳細な説明を受けた。

10月27日、再度上野ヶ丘公民館に於て国府跡確認調査会が開催され、調査地点の確認や現場での発掘について打ち合わせが行なわれた。

発掘調査は南大門跡と推定される地点二箇所からまず着手することに決定された。この地点は、清道貞義氏所有の上田市大字古里字東之手121-2番地と堀江正通氏所有の上田市大字古里字西之手120-2番地の土地であり、所有者の方々の深いご理解とご協力により発掘調査の承諾を得た。

11月1日、市役所西庁舎に於て、信濃国府跡確認調査団の調査会議が行なわれ、遠藤調査会副会長、五十嵐調査団長より、これまでの経緯や現場での調査について、詳細な説明がなされた。こうして準備が整い、昭和57年11月15日、南大門跡推定地に調査グリッドが設定され、鋸入れ式が行なわれた。

調査は翌11月16日から本格的に開始されたが、初日から多量の遺物の出土がみられ、関係者の間で国府跡確認への期待が高まった。NHK、SBC、信濃毎日新聞、毎日新聞等のマスコミ関係者の取材も相次ぎ、発掘現場は活況を呈した。

調査の進展に伴って、土師器、須恵器の破片が多量に出土し、さらに柱穴や溝状遺構なども検出された。このため当初、東大門跡推定地、正丘跡推定地の周辺も引続いて確認調査を実施する予定であったが、この計画を変更し、今年度は南大門跡推定地に対象を絞って調査を進めることになった。

発掘調査は11月下旬の厳しい寒さにもかかわらず連日熱心に続けられ、順調に調査は進展した。そして東之手地籍で162m<sup>2</sup>、西之手地籍で145m<sup>2</sup>の合計307m<sup>2</sup>を全面発掘し、遺物や検出された遺構の記録保存を行なうことができた。

11月29日、奈良国立文化財研究所より山中敏史技官が来院し、現地を視察した。翌30日、現場近くの西野竹公民館に於て、調査会、調査団の合同会議が開催され、山中技官、県文化課の郷道指導主事が出席された。合同会議では、まず五十嵐調査団長より発掘調査結果についての説明が行なわれた。次いで山中技官より視察所見の発表が行なわれた。

山中技官は、国府のきめてとなる8世紀の遺物が殆どみられないこと、検出された柱穴は小さく国府の建物跡のものと考えるには無理があること等の理由から、現在のこの遺跡の状況からでは信濃国府跡と決定することはできないとの結論を表明された。会議終了後合同の記者会見が行なわれ、その発表内容はマスコミ各社によって広く報道された。

こうして現場での発掘調査は無事終了した。引き続いて調査した水田の埋め戻し作業が行なわれ、12月4日をもって、現地での作業は總て終了した。

これ以後は上田市立信濃國分寺資料館に於て、出土遺物の整理、調査報告書の作成が行なわれた。昭和 58 年 3 月 31 日、調査報告書が刊行され、昭和 57 年度の確認調査は終了した。

### 第3節 調査会・調査団の構成

上田市教育委員会は上田市文化財調査委員会の答申に基づいて、新たに信濃國府跡確認調査会、同確認調査団を編成した。そして確認調査事業を信濃國府跡確認調査会へ委託して実施した。

信濃國府跡確認調査会、信濃國府跡確認調査団の編成は以下のとおりである。

#### 信濃國府跡確認調査会

会長	上小郷土研究会会长	高野 豊文
副会長	上田市文化財調査委員会委員長	遠藤 憲三
委員	上田市文化財調査委員会副委員長	箱山 貴太郎
"	上田市文化財調査委員	米山 一政
"	上田市文化財調査委員	黒坂 周平
"	上田市文化財調査委員	横沢 理
"	上田市文化財調査委員	五十嵐 幹雄
"	上田市文化財調査委員	亀井 昭雄
"	上小郷土研究会	小池 雅夫
"	上小郷土研究会	滝沢 泰男
"	神科自治会連合会長	川上 清
"	前神科自治会連合会長	深町 守
"	元上野ヶ丘公民館長	川上 貞雄
"	上田市立博物館庶務学芸係長	川上 元
"	上田女子短期大学講師	塩入 秀敏
"	山口自治会長	山崎 金秋
"	大久保自治会長	金井 自治雄
"	金剛寺自治会長	和田 富太郎
"	伊勢山自治会長	内山 栄喜
"	野竹自治会長	内藤 亀本
"	西野竹自治会長	清水 立義
事務局長	上田市社会教育課長	小林 三男
事務局次長	上田市社会教育課文化係長	金井 俊雄
事務局員	上田市社会教育課文化係	倉沢 正幸

## 信濃國府跡確認調査団

調査団長 五十嵐 幹雄 (日本考古学協会員・上田市文化財調査委員)

副団長 塩入 秀敏 (上田女子短期大学講師)

調査主任 川上 元 (上田市立博物館庶務学芸係長)

調査員 児玉卓文 (上田染谷丘高等学校教諭)

" 林 和男 (上田市立信濃國分寺資料館学芸員)

" 倉沢 正幸 (上田市社会教育課学芸員)

調査補助員 榎田 雄二 (明治大学学生)

" 宮原洋子 (信州大学卒)

" 小林 真寿 (長野大学学生)

事務局長 小林 三男 (上田市社会教育課長)

事務局次長 金井 俊雄 (上田市社会教育課文化係長)

事務局員 川上 貞雄 (元上野ヶ丘公民館長)

### 調査協力者

(地元) 西沢吉次郎・黒沢勝秋・高木宇津彦・清道賢四郎・飯田薰・中曾根直義・梅木実・正橋竹次郎・黒沢泉一郎・川上けい子・柳原迪子・高橋たみ・西沢清志・塙原清人・白石清己・中村実・西沢政雄・清水要次郎・滝田好一・村井留吉・西沢嘉忠司・久保井銀次松・成沢甫・西沢国雄・香山俊雄・西沢とも子・宮崎郁夫

(その他) 五十嵐芳子

(遺物整理・実測) 尾見智志 (明治大学学生)

塩崎幸夫 (駒沢大学学生)

## 第2章 環 境

### 第1節 自然的環境

国府跡が所在すると推定された染屋台地は上田市域の東方部にあり、北に虚空藏山と横山丘陵があり、その麓で東西の長さ約3.5km、東は神川に臨む段丘崖が東北方からやや西南方向に3.8km、西は所謂染屋段丘崖が西方から東南方向に約3kmの長さにあり、この三側線に囲まれた三角形状の地域であり、面積およそ5.76km<sup>2</sup>である。東辺は神川河床より30~25m、西辺は上田市街面より15~20mの高さをもつて台地であり、土質は下部が段丘疊層、上部は2~3mのローム層で第四紀洪積世に生成されたものであり、地質学的には染屋層と呼ばれている。

染屋台地は北辺部が標高580m、南端部は標高500mと約80mの標高差であり模式的な隆起扇状地である。そしてこの扇状地は神川の本流又は支流の浸食をうけていなく、その反面自然流の乏水地域である。染屋台地は地下水位が低く井戸水が得にくく、また田用水は飲料水に適さない性質であるという。土質は有効磷酸、マンガンに乏しく酸性の強い強粘土地帯である。

なお扇状地の微地形的考察では、同心円状に等高線があり、そこに小刻みの凹凸のあることがわかる。その大半は平行しており、東西方向の流路となっているのが凹地となっている。そのうちもっとも大規模なのは新屋堰であり扇状地上の最高地を貫き大幹線となっている。また染屋堰、岩門堰も等高線を切っている。その他にも小さな凹地がいくつかあり、それらが扇状地面上に変化を与えている。しかし染屋台のこれらの変化は人工による堰の開設後、その浸食によって生じたものと考えられている。

### 第2節 歴史的（考古学的）環境

前項自然的環境で述べた如く、染屋台地は自然流がなかったことからその開発が比較的おそく、当地域からは縄文・弥生時代の遺跡および遺物の知見は比較的少なく、主として弥生時代以降のものが、台地の周縁部に知られている。弥生期については発掘調査がされたことがなく、表面採集調査によっている。しかし古墳時代になると北緯の虚空藏山麓に新屋古墳群がありもとは大字上野字鴻呂館及び矢花地籍にかけて20數基があったといふ。いまは鴻呂館地籍に3基残り、矢花地籍には矢花の七つ塚と呼んでいるうちの3基だけが残存している。また塚田地籍である上田市立第五中学校の敷地内にある「カンカン塚」は小規模ながら横穴式石室を残存している。そのほか周知の遺跡は北部では矢花遺跡が神川右岸にあり、矢花七つ塚はこの遺跡の中央にありその周囲広範囲に亘って弥生後期の箱清水式土器の破片と土師器及び須恵器の後晩期に属するものが出土している。また南端には社宮寺遺跡があり土師器、須恵器などの後期にあたる杯、かめの破片

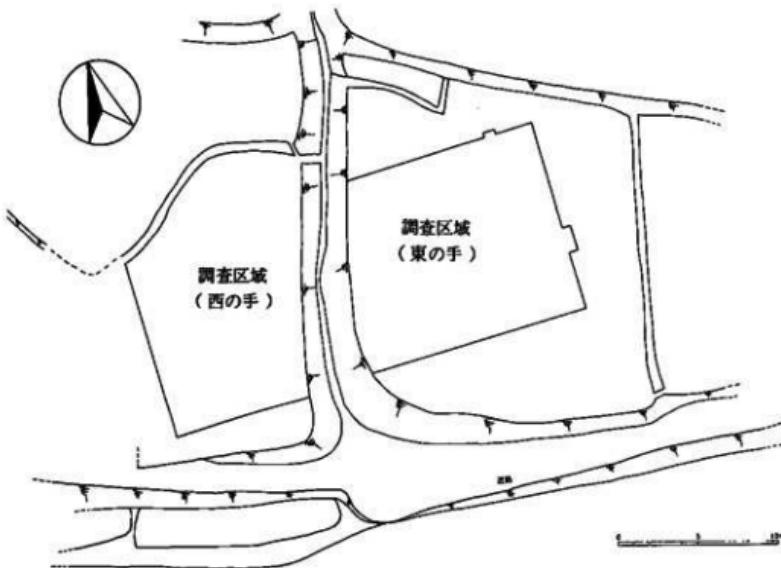


第2図 遺跡周辺の地形

が出土している。西縁では、英遺跡がある。染屋聚落の南部区域の畠と宅地内であり、石器や土師器、須恵器の破片が出土している。

今回発掘調査した地点は染屋台の中央部であるが今までの調査では東の手地蔵からは土師器のうち後晚期にあたる破片が採集されており、西の手地蔵では赤生土器の後期に比定されるものと、土師器と須恵器の中期と後期の両期に属する遺物の出土がある。この両地蔵はともに広範囲にしかも数多く採集されることから一連の遺跡であることを推察できる。

染屋台下段の段丘面は信濃国分寺が建立されたところである。国分寺創置時の信濃国府の所在地としていくつかの地点が推定されたが、一志茂樹氏によって、染屋台地がその有力推定地となつたのは、これらの遺跡も有力な条件とされている。また国分寺との距離及び広さ、そして条里的遺構とそれにともなう旧地名、微地形、用水堰のかかわりなども考証の有力な条件となっていいる。しかし条里的遺構は何時代のものが今のところ不詳である。



第3図 調査区域図

# 第3章 遺構

## 第1節 発掘地点の設定

発掘地点の選定については発掘調査までの経過で述べられているので省略し、ここではグリットの設定について述べたい。

国府跡推定地の所在する染屋台地は自然的環境で述べた如く  $5.76 \text{ km}^2$  に亘る広範囲である。今回の調査は第一回目であることをふまえ、将来いかなる方向へまた広範囲にその調査が展開することを考えつぎのようにした。

### (1) 基点の設定

今回調査した地域は染屋台地のはゞ中央であり、こゝより南部一帯はすでに圃場整備が完了しており、それに対し北方は未実施である。地形の相違をふまえ、この境目を中心とすることにし、「基点」を設定した。その位置は上田市大字古里字東の手 121 番地の 2 にあり、清道貞義氏所有水田南側の東西方向にある農道上で、東の手地籍と西の手地籍の境界に近いところである。コンクリート製の角柱を埋設し、将来の調査に備えることとした。

### (2) グリットの設定方法

前記の基準杭を中心として、東西南北方向へそれぞれ 30m を一区画とし、その面積  $900 \text{ m}^2$  内に方 3m で  $9 \text{ m}^2$  のグリットが  $10 \times 10$  の計 100 グリットが設定できるようにし、東方へ A 区から順序進み、西方へは乙区から逆順に進むことにした。一方南北方向では、基点を 11 番基点とし南へ 10 番から 1 番への逆順とし、北方へは 11 番から多数番への順序に進めることにした。

国府跡の推定範囲はその府域が方 6 町と云われる広範囲であり、今後の発掘調査範囲は漸次拡大することゝ思い、それに備えての設定である。

### (3) 発掘地点の選定

調査会及び調査団協議のうえ、方 6 町と予想される国府域の第一回調査であることをふまえ、諸条件を勘案し、南大門と推定される地点を発掘することにした。

ここは大字上野のうち字東の手と西の手地籍の南限でしかも東西両端の接点であり、この接点に沿って北から南に流下する用水路があり、地形が区切られ、両側が水田となっている。そしてこの水路が国府政庁正門中央から通する南北中央道路、即ち朱雀大路にあたるものであり、この道路をはさんで門が建立され、東西両側の水田内にその遺構があるのではないかと推定したのである。

発掘調査の実施にあたっては、中央の用水路をはさむ土手は、両側ともにそれぞれの畦畔になっていることから、発掘が不能となった。よって今回の発掘は東の手 121-2 番地、清道貞義氏所有の水田と（ここを A 地区と呼ぶ）、西の手 120-2 番地堀江正通氏の所有水田（ここを B 地区

と呼ぶ)を発掘調査した。

A地区には東方へ12mで4グリットを設定し、西方よりA 11の11からA 11の14番とし、その北側は順次A 11の21から24、A 11の31から34、Aの11の41から44までとした。発掘途上に於て西方畦畔まで拡張したため、Z 11の11及びZ 11の21、Z 11の31、Z 11の41の一部に亘ることとなった。

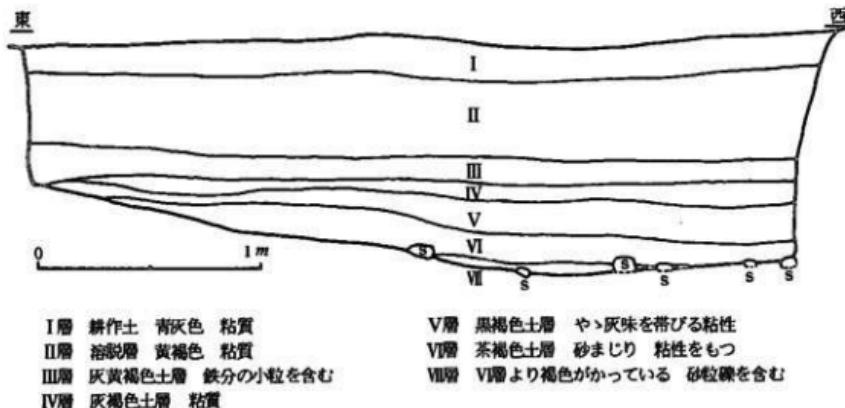
B地区ではZ 11の12からZ 11の14まで9mに3グリットを西方に、北へはZ 11の43までの間にグリットを設定し、A地区との釣合いをとったが、A地区同様地形から北1グリット列及び東方へZ 11の20代列から50代列にかけて漸次東部分拡張した。しかし50代列の西部分は発掘不能となり未調査部分となった。

## 第2節 発掘地点の地学的考察

自然的環境の項で述べた如く、染屋台は東北方より西南方向にゆるく傾斜する扇状地である。したがって発掘地点に於てつぎの諸点から同様であったことを知ることができる。

発掘地点の中央を南流する水路の両側すなわちA地区とB地区の標高に差がある。基点より北方約9mの位置で両地区間の断面をみると、その水田面ではA地区が約24cm高くなっている。発掘途中の遺構検出面での比高差は約8cmである。水田面との差の約3分の1と少ない。それは水田面が造成によるものと考えられる。また遺構検出面は原地面と考えられるが、両地区的計測地点との距離が約4mで8cmのちがいがあり、傾斜していることをあらわしている。

中央を南流する水路はやゝ西よりにあり、水田面から溝底までの深さはA地区で約93cm、西の手で69cmである。両側水田畦畔が中央水路へ下り傾斜して巾約27cm内で溝をつくり溝そのもの



第4図 土層断面図

深さは20~25cmである。溝内部の両側には人頭大の石が並べられた如くいくつか残存している。溝底は小砾を含む岩層となっている。

A地区の西南隅に地層確認のため検出面下までのトレンチを試掘した結果がつぎのようである。染屋台地は強粘土の地質であることが知られ、焼物に使われている。国の重要民俗文化財に指定されている染屋焼はこの粘土を利用したものであり、国分寺創立時からの瓦に使われていたと言われており、瓦の材料として常に使われ製瓦焼成がさかんであり近くに瓦窯（現川原郷）という地名が残るとともに最近まで瓦焼成窯がみられた。また、第二層以下の粘土を掘りとって移出売却し相当の収入を得たという。この粘土をとることを地元の人々は「おさぬき」とよんでいる。先は埼玉県川口市の鉄物工場などで、その量も多いため、採取後小面積の水田が合わされて大形になったという。そのために条里造構が変容されていることが多い。当地の地形考察には充分な考慮が必要である。

### 第3節 検出遺構

#### A地区について

##### 1 溝状遺構

A地区に於て発掘時には溝状遺構として7遺構があるように考えられたが、発掘終了後では溝状遺構は3遺構で、他は土塁状遺構とし、その項で述べることにした。

###### (1) 第1号溝状遺構 SD01 (第6図)

北縁近くで西北方から東南方向に走る溝状遺構である。溝の中央底部までの深さは西部が27cm、中央部で35cm、東端で41cmであり、西方から東流した形である。上端の巾は中央部でもっとも広く2.5mである。中央より西半部はほど同じ広さの巾であるが、東半部では南縁が溝内に出張っているため、約1.6mとせまくなっている。なお中央や西方即ちA 11-42グリット内で、溝内埋土上面に長径2mを東西に短径1.4mのほど円形状の範囲に焼土および炭化物が集中的にあり、またその内部に土器の破片が二ヶ所に群在していた。これらの遺物は溝内に埋土した後のものであり、溝が形成されたのはそれより古期と考えられる。

###### (2) 第2号溝状遺構 SD02

西縁に沿い南北のほど中央部にある。さきにも述べたが、発掘域の西南隅に東西3.6m、南北約5mのほど長方形の範囲に黒色を呈するところがあるが、その北辺の中央部から約1mの巾で北へ向かってはじまり、北進するにしたがい漸次その巾を縮少しながら約2mの長さにある。さらに東へまがって巾は約30cmとなるが約1.5mの長さにあり、その後は東南方向へむいて巾90cm内外で長さ2.5mである。したがって全体の様相は円弧状である。深さは処々不同で、西溝15cm、北溝2m、東溝27cmと計測でき、水の流れた遺構よりも水溜りの如き遺構と考えられる。

### (3) 第3号土塙状遺構 SD03(第7図)

東南隅にあり、南縁からはじまり北へ約3mの長さにあり、巾約30cmである。深さは平均8cm内外である。南縁内へ統くものと考えられる。この遺構もSD02と同性格のものであろう。

## 2 土塙状遺構

### (1) 第1号土塙 SK01

西南隅の黒色土帯すぐ西側にある。南北約1m東西約70cmの階円形状であるが南端部を柱穴状遺構が二つ切合った状態にある。深さ2cmと浅く、ごく浅いほりこみのごとくである。

### (2) 第2号土塙 SK02

中央や南よりにある。一辺約1.25mのほゝ四角形である。内部は最深部が西よりにありその深さ約20cmで、壠鉢状になっている深い土塙である。

### (3) 第3号土塙 SK03

SD02の東側約80cmの位置で、ほゝ平行した位置にある。全形は凹字形で長さ3.3m、東西の凸部の巾70cmと80cmであり、中央の凹部は50cmである。底部は南よりにあり深さ18cm内外の浅いものである。

### (4) 第4号土塙 SK04

東北部でSD01の南側に平行した位置にある。長さ3.2mで最広部は東よりにあり、巾約1mの不整長階円形である。底部は長さ2.4mにあり東側が広くあり深さは約38cmである。西側が深さ27cmのため10cm余の差がある。

### (5) 第5号土塙 SK05

西北隅にあり、SD01の南側約1m離れた位置にある。長さ約1.2m、巾30cmの大きさであるが最深部12cmのため皿状である。

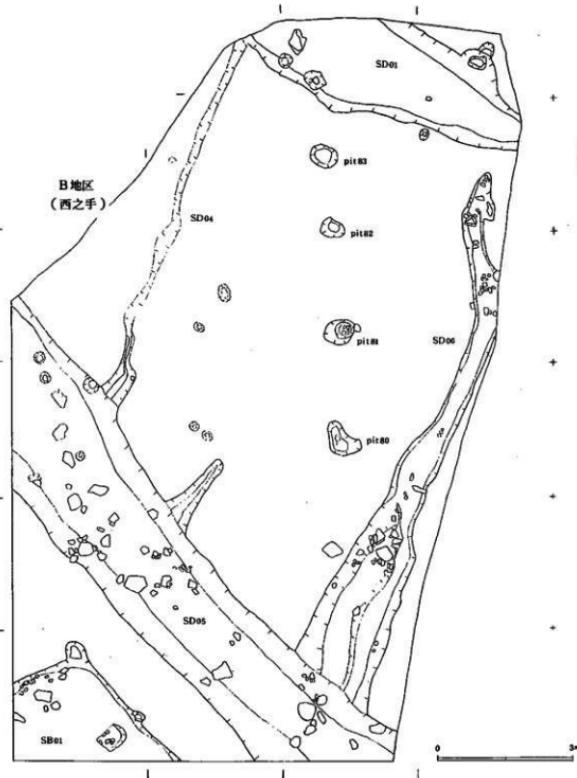
### (6) 第6号土塙 SK06

SK02の北側に壁状にあり、両辺ともその長さ約2mである。巾20cm内外であるが、もっとも深いところが14cmという浅いものである。土塙というよりくは地と考えたい。

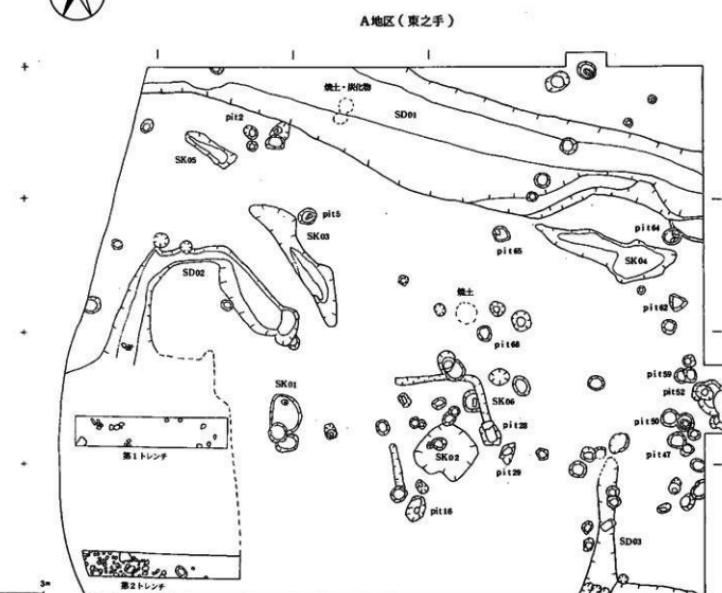
## 3 柱穴状遺構

発掘範囲全域に亘って、およそ70余の柱穴状遺構を知ることができた。そのうち東縁中央南よりのところと、第6号土塙の周囲に比較的多くある。規模はその径およそ30cm内外であり、深さは15cm内外である。底部に平板な石をえたもの、建てかえたもののごとく、切合ったものがある。

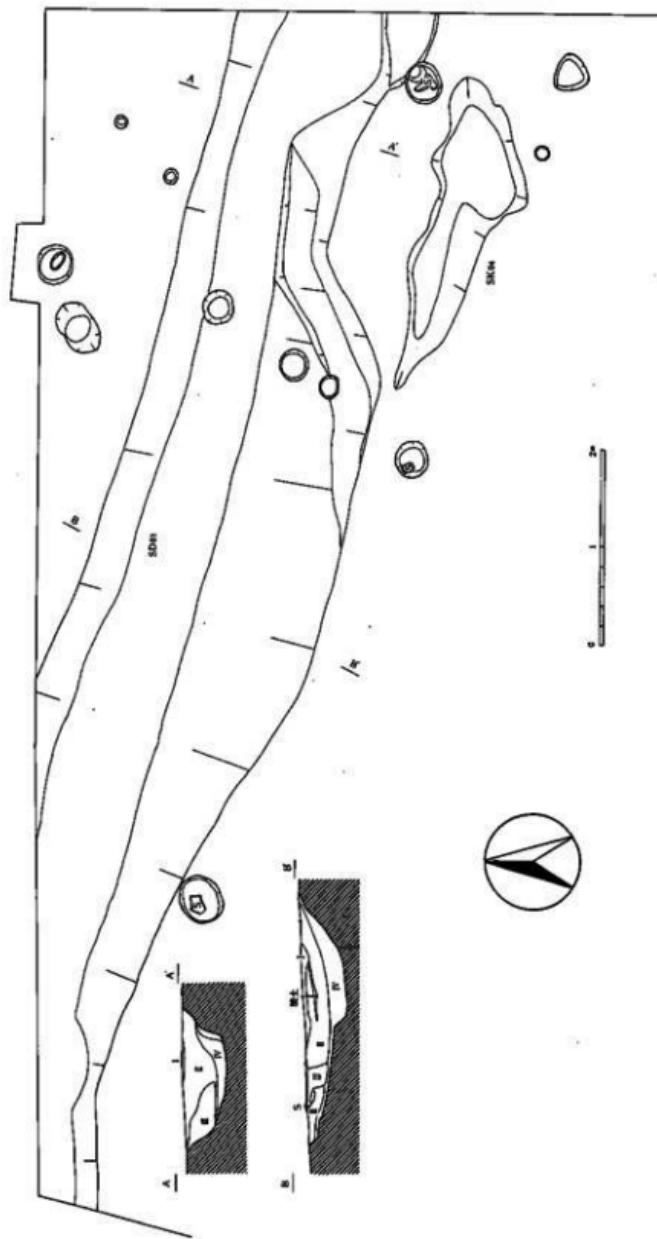
これらの穴が獨立建物のプランとなるものはない。ただ東縁近くにつぎのような遺構をくみ合せることができるので参考までに述べておきたい。(16頁の図参照)

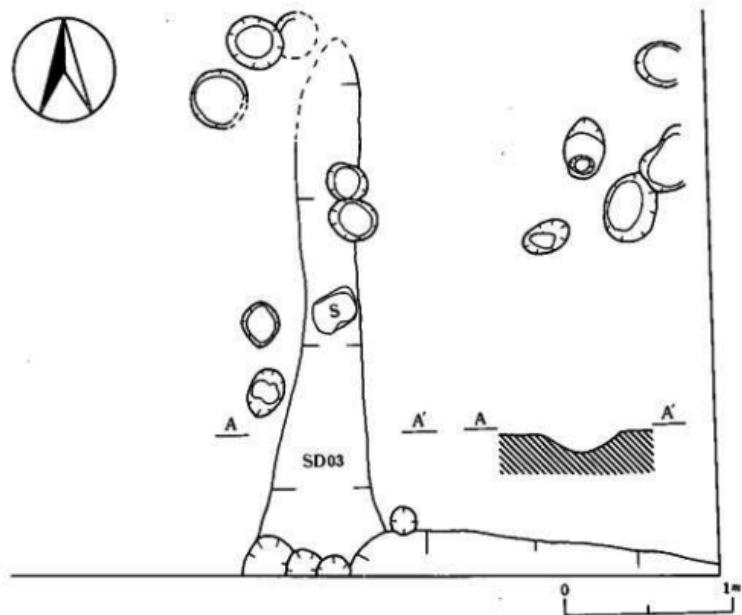


第5図 遺構全体図



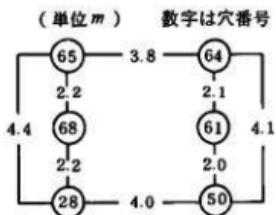
第6圖 SD01・SK04 斷面測量圖



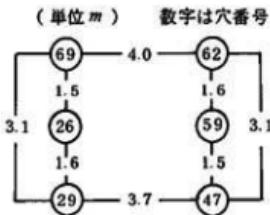


第7図 SD03周辺実測図

第1号のプラン



第2号のプラン



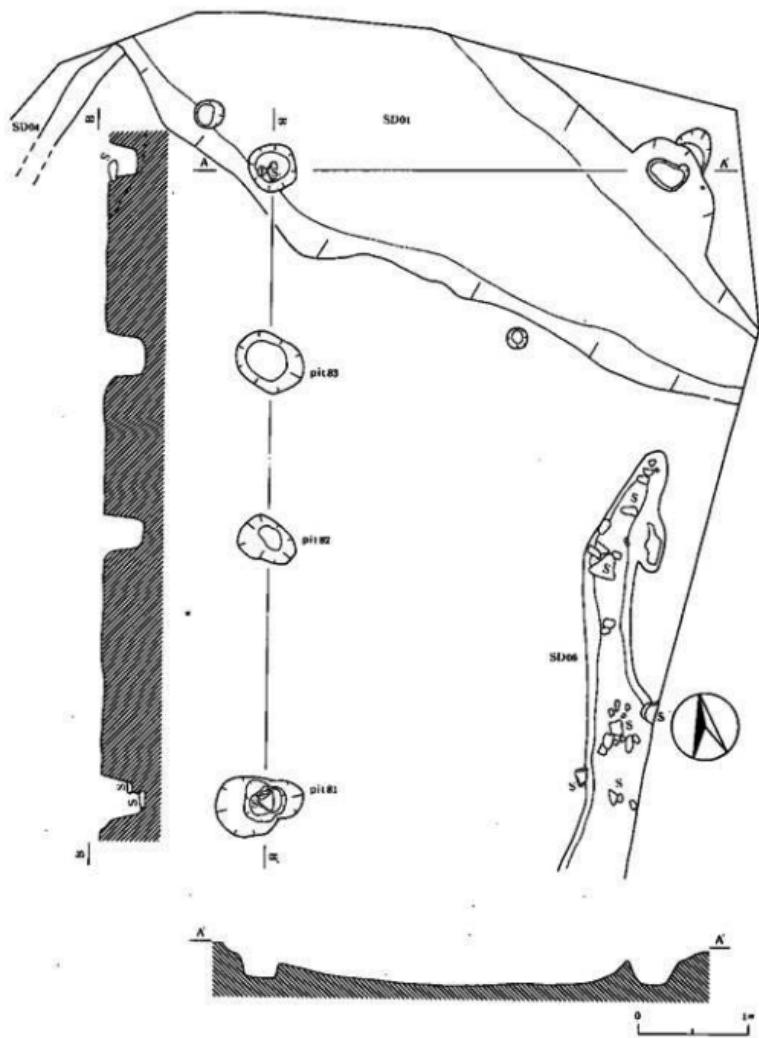
二つのプランともに南及び北辺が2穴であるのに対し、東・西各辺はそれぞれ3穴である。

#### B地区について

##### (1) 検出された遺構

発掘域の北端にそって溝状遺構がある。A地区の第1号溝状遺構(SD01)の西北方への延長線上にあることから、第1号溝状遺構とした。

西端にそって南北方向に二筋の溝状遺構を知り得たが、発掘に進むにしたがい西側の遺構は消



第8図 SD01, SD06, pit81~83 察測図

滅した。よって残存した溝状遺構をA地区からの通し番号として第4号溝状遺構（SD04）とした。

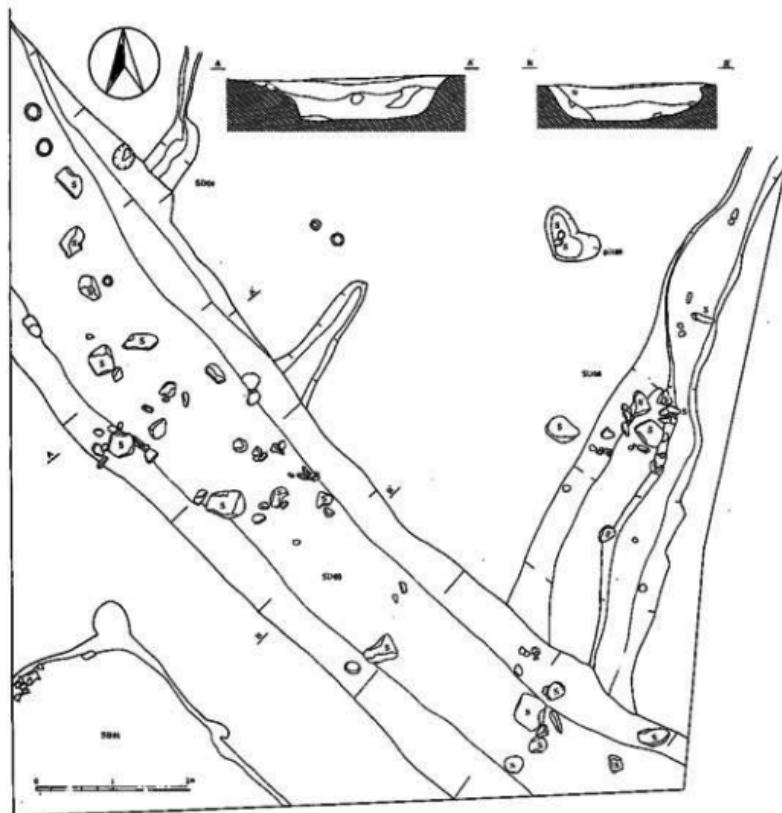
南半部分では西北方から東南方向にあるのを第5号溝状遺構（SD05）、東端に沿って南流するのを第6号溝状遺構（SD06）とした。

西南隅に堅穴住居址の一部を知り、またSD01の南壁に一穴をおき南方へほぼ等距離に柱穴状遺構が4基あり計5基を知り得た。柱穴状遺構の数はA地区に比較すると少數である。なおB地区に於ては土塙状遺構を知ることができなかった。

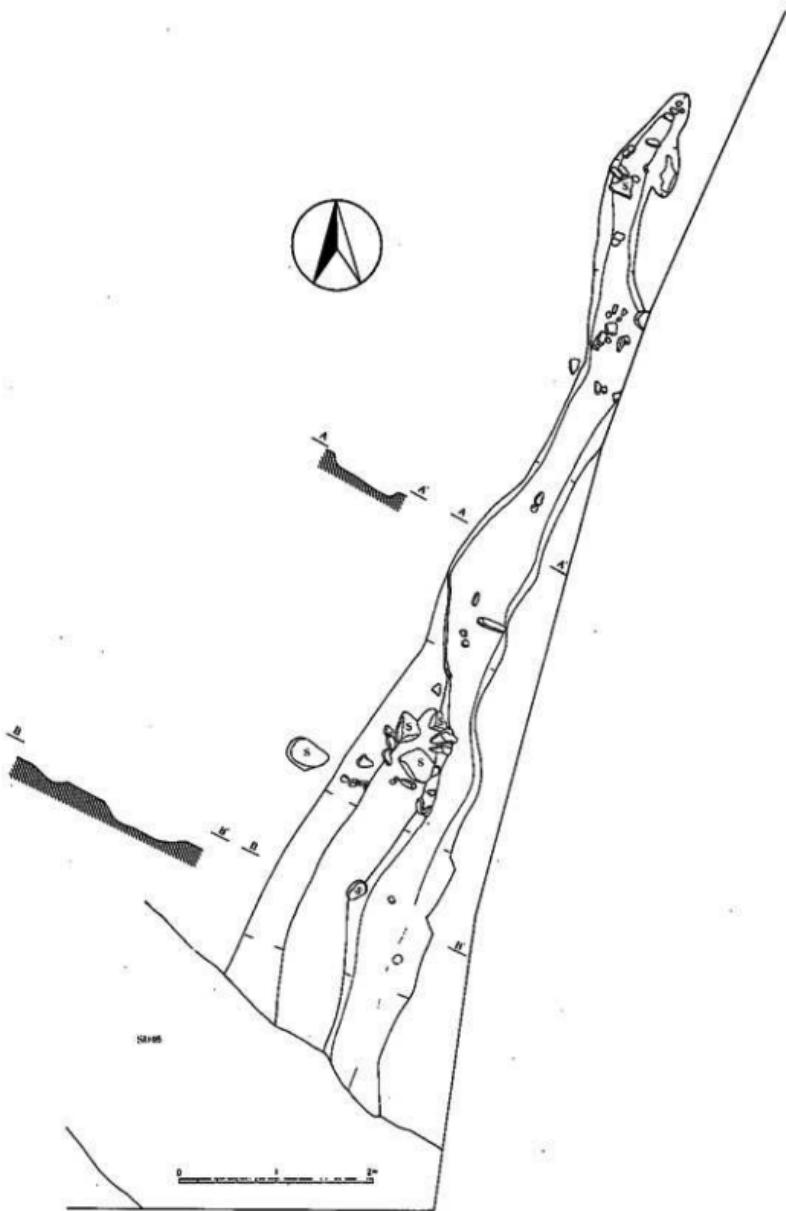
## (2) 溝状遺構について

### ① 第1号溝状遺構 SD01（第8図）

前述の如くA地区からの延長遺構と考えられる。東端での巾は上縁で約80cm、内底部の巾約40



第9図 SD05, SD06 周辺実測図



第10図 SD06 実測図

cmである。西方へ向って漸次広まり、最広部では上縁の巾2.7mであり、内底部で1.8mと広くなっている。長さ約5.2mだけ発掘することができた。深さは東端で29cm、西端では30~32cmであり、溝全域の深さにはほとんど変化がない。基準点からのレベル差も同様少ない。

#### ② 第4号溝状遺構 SD04

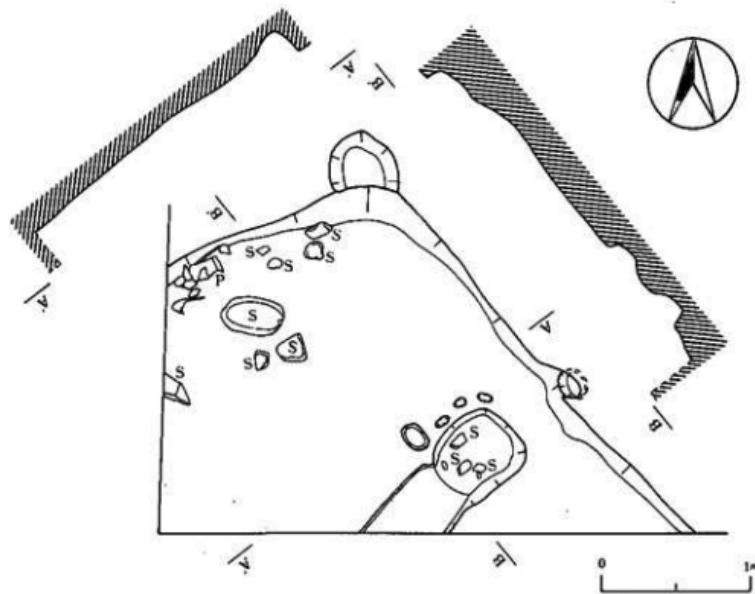
西縁に沿って南北方向にあり、巾20cm内外である。深部の深さ10cm内外であり、4cmという浅いところもあり、深浅が不定である。内部に埋石がないことから暗渠ではない。レベル差は2~3cmでありSD05に接する地点が深くなっている。遺構の性格については今後の考究に待ちたい。

#### ③ 第5号溝状遺構 SD05 (第9図)

B地区内の南部で西北方から東南方向にかけてある。上縁での巾約2.8m内底の巾約1.7mの規模である。検出当初はSD01とはゞ平行するかと見えたが、東方に進むにしたがい両遺構間の距離が広がり平行しないことを知った。また西方の未発掘地域内に延長しても合流しないものと考えられる。

遺構全容に変化が少なく、巾がもっともせまいところ(東部)で約2.3mであり、もっとも広いところとの差約50cm内外である。また検出面からは10cm余の浅深の差はあるが、レベルそのものには変化がなく、内底部が一方に傾斜していることがない。

溝内には多数の石がある。内底面に接しているものと、壁内にあるものを含めて内底面より20



第11図 SB01 実測図

cm余浮上した位置にあるものとがある。これら諸石の相互関係、また性格等については知り得なく、今後の調査に期待したい。

#### ④ 第6号溝状遺構 SD06（第10図）

B地区の東端に接する位置で南北方向にある。北端はSD01南壁端から約50cmのところからはじまり、南端はSD05と合している。総長約12mである。北から約8mの地点に石群があり、溝は二分され、以南は中央に中洲をもった二つの溝状になっている。巾には変化が少なく上縁で平均55cm内外である。検出面からの深さ北端部で約2cm、中間部で7cmとなる。二分した下方では東溝は14~16cmと深いが、西溝は6~7cmと浅い。しかしレベル的には北部を0とするとき中間部で7cm深く、南部での東溝は25cm、西溝は12cmと深く、南が低く、この遺構は南流してSD05と合流している。

#### ③ 壺穴住居址 SB01（第11図）

B地区の西南隅に壺穴住居址の一部がある。前述したSD05の南壁の南へ約60cm離れて東壁の一部があり、その方向はSD05とはほぼ平行しておりその西北端で約115度の外開きの角度で北壁と接している。知り得た規模は東壁が約3.5m、北壁約1.5mでそれぞれ未発掘区域となっている。したがって全容は推察しがたい。床面は凹凸しているが検出面からの深さは北隅で約21cm、東南隅で約20cmであり、平均して約20cmと考えられる。北隅には径60cm×40cmの円形状の造り出しがあり、その内部に径30cm×24cmで深さ21cmの掘りこみがある。また東南部に一辺55cmと45cmの規模で浅さ21cmのほぼ四角形の掘りこみがあり、内部に石が数点おちこんでいる。床面に掘られた土塗と考えられる。

北壁がの西端すなわち発掘域の西縁とが接するところの床面上に50cm×25cmの不整円形状の広さに焼土帯があり、さらに土師器の破片が多量に群在していた。焼土部分が壁に造作した「かまど」か「地床炉」なのかについては発掘し得た部分が小範囲のため決定できなく今後の調査に待ちたい。

以上一部分発見された壺穴住居址についての知見について述べたが、焼土部に群在した土師器と同一期のものと考えられる。

#### ④ 柱穴状遺構について

B地区の中央や東よりの位置で南北方向に5ヶ所の柱穴状遺構がある。最北端にある第1号はSD01の西北部の南壁にあり、径約50cmで鉢状で内部に石が二つある。

第2号は第1号との心心約1.8m径47cm、深さ約38cmのほぼ円形であり、底径は約35cmで平である。第3号は2号との心心約1.6mで、長径60cm×短径40cm、深さ約38cmの扁円形である。第4号は第3号との心心2.2mの南にあり、上縁の径50cm×80cmの階円形で深さ37cmあり内部に石が置かれている。第5号は第4号との心心1.8mで長径70cm短径65cmの不整階円形で深さ約18cmである。5つの柱穴はほぼ直線上に並び、心心もほぼ等しいので柱穴列と考えられるが、一列だけであるから断定することはできない。今後発掘面積の拡張等により対象する遺構等を得た時点で再考したい。

# 第4章 遺物

今回の調査は、面積的にはわずかな範囲であったにもかかわらず、出土した遺物の量は比較的多かったといえる。これらは大別して、土師器、須恵器、灰釉陶器、青磁、石器などに分類できるが、その大半の資料は土師器であり、他の遺物は若干にすぎないという所見を得た。また、各遺構別に遺物の出土量をみると、A地区に検出された土塗状遺構からの資料が少なく、反面B地区の溝状遺構SD05から多くの資料が出土し、他はわずかづつであった。

これら確認された遺物の細部については今後さらに検討するものであるが、現時点でおおざつばな時期推定を試みた結果、信濃国府が存続したとみられる時代に直接結びつく資料は意外に少なく、概してより古い時期の遺物が検出されたことである。

以下、各遺構別に検出された遺物について簡単にふれてみたい。なお、遺物個々の細部については出土遺物一覧表を参照していただきたい。

## 第1節 溝状遺構出土の遺物

### SD01（第12図3～5、第13図6、第16図1）

本遺構はA地区からB地区に接続したものと推定される。B地区的SD05と比較した場合、ほぼ同規模の溝遺構であるが、砂質の推積土層中に石礫が少ないことである。

遺物はむしろA地区に集中して検出された。これらの遺物の出土状況は、堆積土層中から溝底部に至るまで一様に認められたが、資料の時期的な差はあまり感じられなかったといえる。むしろ同一時期埋没したと思われる資料である。なお、本遺構から出土したものでは、土師器の壺と壺形土器がある。壺は口縁部と底部片で全器形を知り得ないが、口縁部がくの字状に外反する長胴形を呈すものとみられる。その整形はヘラケズリ・ヨコナデさらにハケメが観察される。また、壺は丸味を有する胴部で、中位に最大径をもつものである。器面のヘラミガキ整形が著しい。図示した5・6はいずれも遺構のほぼ中央部から検出した壺形土器である。これらが出土した周辺は焼土および炭化物が集中して確認された地点であったが、調査ではこの遺構を明確にできなかった。したがって、検出された土器群は溝遺構に関連したものか、あるいはその後の焼土を伴う遺構と関係した資料であるかは不明である。6の壺はかなり古様を示すものと思われる。すなわち、千曲川水系第2様式（和泉期）位に比定できると思われるし、新しくしても鬼高期前半の様式を示すものであろうか。

なお、本遺構の中央部から第16図1に示した大形石器も出土している。台形状の断面を有する石器の両端には剥離痕がみられ、表面全体にも使用による磨耗痕が観察される。あるいは荒砥

石としての機能を有したものであろうか。泥岩製である。

SD03 (第13図7~9)

A地区東南隅に確認された本遺構は、南北に細長くのびる幅の狭いものである。南側が調査区域外に延びているため追求できず全容が把握できないが、その形状から判断して南は大きく広がる遺構とみられる。本遺構の周辺には、またいくつもの柱穴状遺構も検出されており、それらとの切り合い関係も確認される。

SD03 遺構内からの出土遺物としては、土師器小形甕と杯がある。甕はくの字状に外反する口縁部を有し、器壁が比較的薄いものである。また、杯は上げ底状器形をとる厚手のもの8と、内面黒色処理を施した薄手のもの9がみられる。前者はとくにヘラケズリ・ナデにより器面内外を整形し、後者は胴中位の内外面に段を有する器形を呈す。

SD05 (第13図10~14、第14図15~26、第15図27~32、第16図2)

B地区南側に検出された本遺構は、その内部の砂質層中から溝底部にかけて大小の河原石が多数みられた。遺物もこの層中に確認され、各遺構ではここからの出土が一番多かったといえる。土師器の杯、壺、甕、瓶、手づくね土器、盤、高杯形土器等各器種が確認された。

杯形土器の大半は内面黒色処理した資料であるが、わずかにそうでないものもある。胴部と底部の境界が明瞭でなく、むしろ丸味を帯びた不安定な形状をもつ資料が多いようだ。また、全体の器形は頸部で一旦くびれ、さらに外反する口縁部を有するものと、直線的に外反するものとがみられる。器面の整形はヘラケズリとミガキを多用している。

壺形土器として分類した資料は、あるいは鉢ともいえる。18のように胴上部でわずかにくびれ、ゆるやかに外反する口縁部をもつものと、19のように口縁部が内輪気味に外反するものとがある。两者とも口縁部内外面をナデ整形し、あとはヘラケズリ、ミガキ整形している。

甕形土器には小形と大形がみられる。いずれも口縁部片のみであるため全体を知り得ないが、前者はゆるやかに外反し、後者は大きく外反する口縁部をもつ。22は長胴甕とみられる資料であろうか。また、21の口唇部は須恵器の成形に用いられる手法を示している。整形は口縁部を横位のナデにより、胴部を縦位のヘラケズリを施しているものが多い。

23は単孔の瓶底部片である。上部の形状は不明であるが、おそらく鬼高峰期のはじめにわずかに検出される一対の把手付の資料と考えられる。色調は乳黄色を呈するが、一部黒色を呈している。また、24はSD05の東南隅から出土した手づくね土器である。外面をヘラケズリし、内面はヘラと指頭によるナデ痕が観察でき、さらに内面黒色を呈している。

図示した25は小形甕とも盤形土器とも呼ばれる形状を有するものである。器面をヘラミガキとナデ整形し、口縁部は横位のナデが施されている。また、26は底部欠損して不明であるが、口径に対して浅い杯であるため、盤形土器ともみられる。内面黒色処理し、下半に一条の沈線がある。

高杯形土器では脚部片が多く検出され、杯部片はわずかであった。27は内面から口縁部外面にまで黒色処理された高杯の杯部である。器面の整形はヘラケズリの後にナデ調整し、さらに口縁部は横位のミガキ整形を施している。他の資料は脚部片である。これらの形状からみて、全般的に鬼高中期ごろに比定できる資料と思われる。

また、本遺構の東隅部から土器に混って第16図2に示した擬灰岩質の石器も確認された。平らな片面に斜状に走る磨耗痕が観察でき、この部分がツルツルしている。荒砥石としての機能を有したものであろうか。

#### SD06（第15図33）

B地区の東側隅に南北に走る細長で浅い遺構である。SD05と接続しているが、その切合い関係からSD06の方がやや新しいように見受けられた。

本遺構から検出された遺物は概して少ないといえる。33に図示した資料は、宝珠のツマミをもつ須恵器蓋で、遺構のほぼ中央部から検出された。ロクロの水ビキ成形後、さらにヘラケズリによる整形を施し、器面を調整している。鬼高末期ごろ（7世紀末）に比定される資料と思われる。

## 第2節 柱穴状遺構出土の遺物

### A地区（第15図34～36・40・41、第16図1・3～5）

柱穴状遺構はA地区に多く検出されたが、いずれも不規則な配列を示すとみられるため、各遺構の性格や他遺構との関連が今回の調査では不明であった。しかし、溝状遺構SD01との切り合い関係が一部にみられ、明らかに本遺構の方が時期的に新しいものもあることが把握できたのである。

本遺構に関連する遺物は、ピット内からとその周辺から出土したもので、土師器の杯、甌、甕、鉢形土器などがある。34はA地区の北西部に検出されたpit2から確認された杯である。器盤が薄手で頸部でややくびれ、口縁部外反する内面黒色処理土器である。整形はヘラケズリとミガキを併用している。また、35は同様にpit5内から出土した土師器の甌である。鉢形容形を呈す平底底部に6孔の小穴がみられるが、一部欠損のため不明である。多分7孔があったと推定される。器面はヘラケズリで口縁部は横位のナデ整形が施され、内面を黒色処理している。さらにまた、36の甕も同一ピット内から件出した資料である。薄手に成形された器壁は、内外面ともに黒色を呈し、口縁部がくの字状の器形である。さらに口唇部に片口状の彎曲した箇所がある。整形は胴部をヘラケズリ、口縁部を横位のヘラミガキを行なっている。

その他、A地区から出土した遺物として、図示した40・41がある。40はA地区東北隅のA-11-43グリッドから検出された小形青磁皿である。内面に沈線がみられる小形皿で、今次の調査で確認した大半の資料とは異って時代の下る中世遺物である。また、41も時代のやや新しい灰

釉陶器の高台部である。今回の調査における唯一の灰釉陶器資料である。東濃系とみられる。第2トレンチ出土。

また、第16図3～5に示した石器も検出された。3は南側に位置したpit16から確認された安山岩製の荒砥石とみられる資料である。片面のほぼ全面に研磨痕が観察できる。4もpit52からの出土であり、3と同様な機能をもったものと思われる。これは両サイドがほぼ全面にわたって磨耗しているし、横に磨耗と敲打痕が観察でき、磨石に類似する形状を示している。安山岩製である。5は頁岩製の横刃形石器ともいえるものであろう。薄い剝片を素材にして簡単な調整によって刃部を作出したものである。石底丁的な機能を有したものであろうか。

#### B地区(第15図37～39)

本地区は東側のA地区に比して、いわゆる柱穴状遺構の検出が少なかったが、pit80～pit83にみられるような南北に1列に並んだ比較的大形の柱穴状遺構が確認された。

検出された遺物としては、pit81内からの土師器鉢と更にE-11-26グリッドからの須恵器蓋がある。37は口縁部のみで全形を知り得ないが、多分鉢器形を呈すものとみられる。肥厚した口縁部はさらに外反し、内面黒色処理を施している。また、器面はケズリ整形である。38の蓋も同一ピット内から出土したもので、くの字状に外反する口縁部を有す。胴部中位に最大径があるものとみられ、ヘラミガキによる整形痕が観察できる。また、39の須恵器蓋はツマミのない形状を示すもので、中位にくびれをもつ。ヘラケズリによる整形が施されている。外面青灰色を呈し、内面はなめらかで灰白色を呈す。

### 第3節 堅穴住居址SBO1出土の遺物

(第12図1・2)

B地区的南西隅に確認された本遺構は、住居址の一部である。その大半が調査区域外へと続いているため、全容を把握するに至らなかった。隅丸方形か長方形プランをもつ住居址と考えられる。

ここから検出された遺物には、石組みカマド付近からの大小の甕がある。1は長胴甕でくの字状に外反する口縁部から、内縁しながらほぼ直線状に底部に続くカーブを描く器形を呈す。胴部に縦位のヘラケズリおよび口縁部から頸部にかけて、横位のナデ整形が施されている。本資料は胴部の張り等からみて、おそらく鬼高窯最終末に比定されると思われるが、あるいは真間期(8世紀代)位まで下げる可能である。したがって、本住居址の構築、存続時期もこの頃と思われる。

以上、大変おおざっぱに各遺構出土の遺物をみてきた。今後さらに細部について検討していくつもりである。

出土遺物一覧表

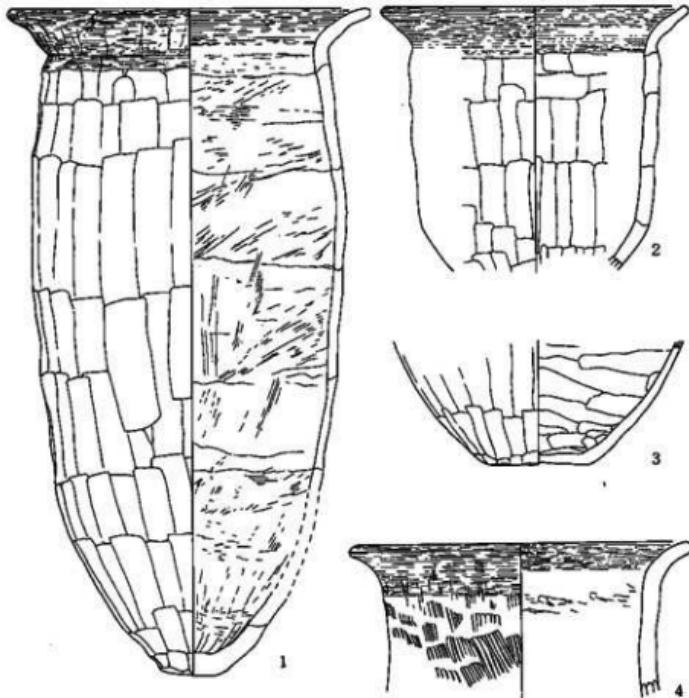
土器

遺物番号	基盤	高さ	口径	底径	形状上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成色	圖	出土地点	備考
1 磁	36.3	20.1	3.0	長脚、口縁外反	ヨコナナデ・ヘラケズリ	唇部、石質等多出に 黒斑母・石粒含む	良好	黒褐色	SB01	土師器	
2 小形甕		17.0		口縁外反	*		やや軟質	*	*	*	
3 磁		5.5	平底		ヘラケズリ	石粒多い		灰褐色	SD01	*	
4 *		1.9.2		口縁外反、肩手	ヨコナナデ、ハケメ	茶色粒子多	軟質	褐色	*	*	
5 瓢		1.2.7		口縁直立・脚丸	ヘラミガキ	良質		黃褐色	*	*	
6 *	壺子 <sup>2/3</sup> 部	1.9.5		脚丸・最大幅脚中央	ヘラミガキ・ヨコナナデ	*		*	*	*	
7 小形甕		1.6.5		口縁外反	内外面ヘラミガキ	骨質母・石英等多量 含む	やや軟質	外二重層褐色	SD03	*	
8 环		3.9	1.2.6	厚手、上げ底	外面ヘラケズリ+ミガキ、ナデ	石粒含む	やや軟質	*	*	*	
9 *	*	1.2.8		内面に段	内黒	細粒子含む	良好	黄褐色	*	*	
10 *	*	1.2.8		厚手	内黒	黑質母含む	やや軟質	SD05	*	*	
11 *	*	3.7	1.3.0	丸味のある底部	外面ヘラミガキ・ケズリ、内黒		軟質	乳白色	*	*	
12 *	*	1.3.8		口縁やや内斜	ハナナデ・ヘラケズリ	細粒子含む	良好	*	*	*	
13 *	*	3.2	1.1.0	5.5 腹部に段	ハナナデ・ヘラケズリ、内黒	系色粒子含む	軟質	黄褐色	*	*	
14 *	*		1.3.0	*	ハナナデ、内黒	黑質母含む	良好	茶褐色	*	*	
15 *	*	1.4.5		腹部くびれ	ハナナデ・ヘラケズリ、内黒	細粒子含む	やや軟質	黄褐色	*	*	
16 *	*	4.5	1.3.0	内面にくびれ、口縁外反	口縁外ナデ・脚部ケズリ	良好	良好	黄褐色	*	*	
17 *	*	1.4.0		直線的二つ外反	ハケメ、内黒	*	良質	黄褐色	*	*	
18 瓶		1.9.0		脚中央わずかくびれ	口縁ナデ、ミガキケズリ	粒子多い		乳白色	*	*	
19 *	*	1.9.8		内側複数の口縁	口縁ナデ・ケズリ、内黒	茶色粒子多く含む	やや軟質	*	*	*	
20 小形甕		1.3.9		口縁外反、肩手	口縁外ナデ・ケズリ+ナナデ	石粒多く含む	良好	乳白色	*	*	
21 完		2.4.5		口縫、乳頭部の形状	ナデ・ケズリ	腹かた・胎土	*	乳白色	*	*	
22 *	*	2.5.5		口縁外反	口縁内外面ナデ、胎内外ミガキ	良質		外二重層褐色	*	*	
23 盆		6.5		脚孔	外面ヘラケズリ、内面ナデ	白色粒子多	やや軟質	乳白色	*	*	

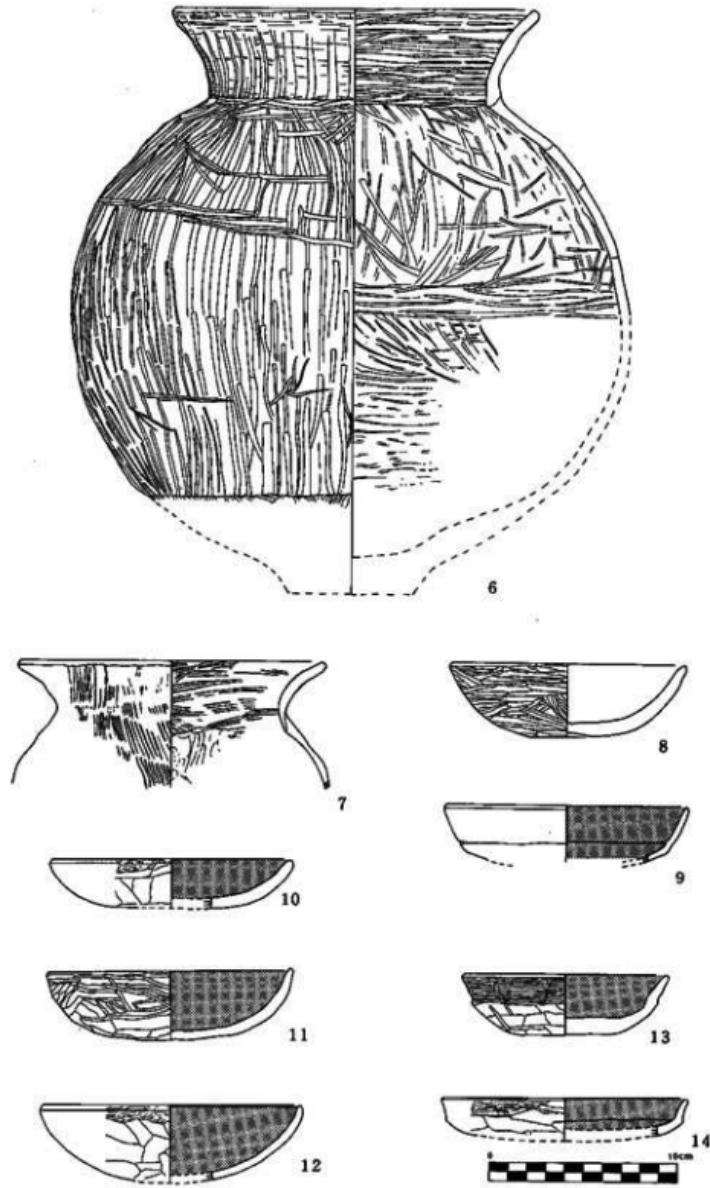
24	手づくね土器	5.0	6.0	2.0	厚手	外側ハラケズリ、内面指脱ナデ 口輪内側、丸味	石粒、黒雲母多く含む	良 好	乳白色	SD05	土師器
25	縄?	6.4	6.6			口輪ナデ、輪部ミガキ・ナデ	茶色粒子多	やや軟質	明褐色	"	"
26	壺	20.7				ミガキ、内側	石英、長石多く含む	良 好	"	"	"
27	高 环	1.3.5				ミガキ・ケズリ、内側	細かい粘土	やや軟質	乳白色	"	"
28	"	1.2.1				ミガキ	茶色粒子含む	良 好	明褐色	"	"
29	"		1.0.0			ケズリ・ミガキ、环部内側	黒雲母含む	"	赤 色	"	"
30	"		1.0.0			石粒多く含む	白色石粒多し	やや軟質	乳白色	"	"
31	"		1.0.0			輪部輪形	白色	軟 质	灰白色	"	"
32	"		1.0.0			輪部ラッパ状、透孔?	ミガキ	"	良 好	乳褐色	"
33	壺	2.8	9.6			ハラケズリ	ナデ・ケズリ・ミガキ、内側	"	青灰色	SD06	須惠器
34	环	1.5.9				口輪部くびれ外反	ナデ・ケズリ、内側	細かい粘土	乳黄色	pi112	土師器
35	瓶	7.2	17.1	5.0	身丸(7丸か?)	片口状口盤	口輪部・白色石粒多 く含む	やや軟質	褐色	pi115	"
36	甌	2.3.0				ケズリ・ミガキ、内外面黒色	石粒多く含む	良 好	黑 色	"	"
37	鉢?	2.5.5				口輪部厚手・外反	ケズリ、内側	黒雲母含む	良 好	pi181	"
38	甌	2.0.0				内外面ミガキ	"	やや軟質	明褐色	"	"
39	甌	1.0.4				ケズリ	"	良 好	青灰色	Z-11-26	須惠器
40	皿	3.2	11.1	6.0	内面に沈線	底部右まわりヘラケズリ	"	"	"	A-11-43	青 瓷
41	壺		7.6							第2 下レシチ	瓦胎輪器

## 石 器

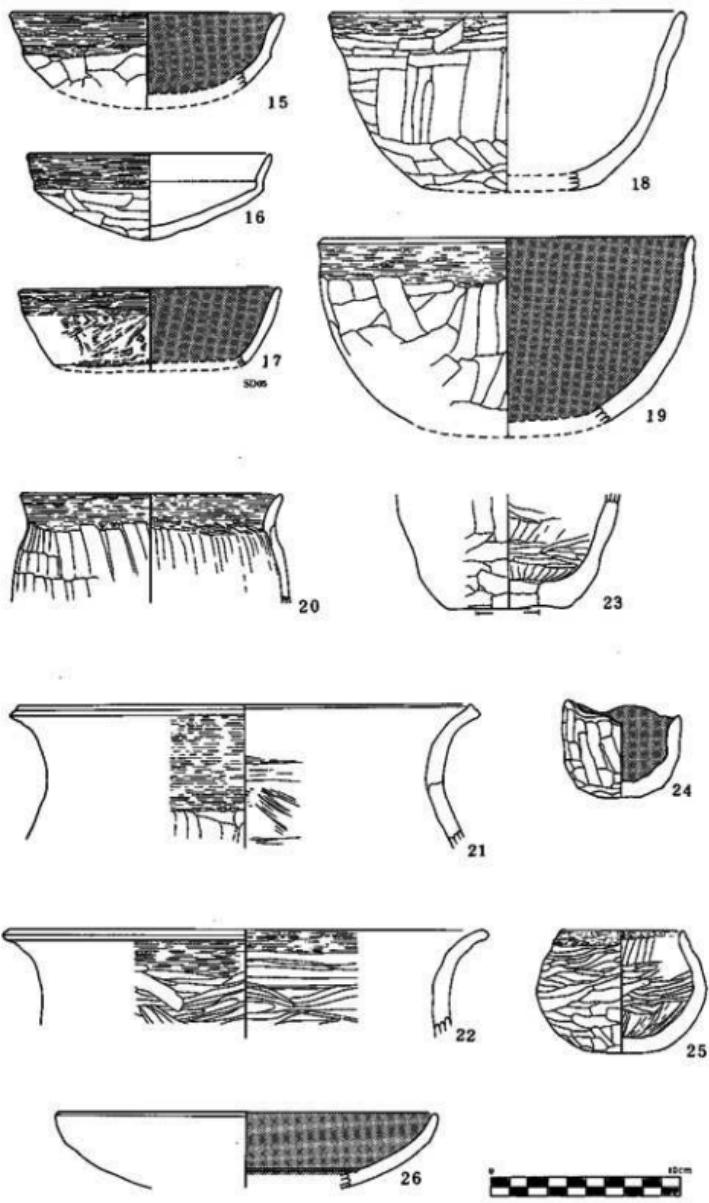
通号	名 称	法 長 最大長	法 寸 cm	石 質	出土地點	備 考
1	荒砥石	28.0	10.3	荒 砂	SD01	
2	"	16.2	11.3	礫灰岩	SD05	
3	"	12.2	9.0	安山岩	pi116	
4	"	11.4	8.5	"	pi152	
5	塊刃型石鎚	6.5	3.5	頁 石	Z-11-27	瓦胎輪器



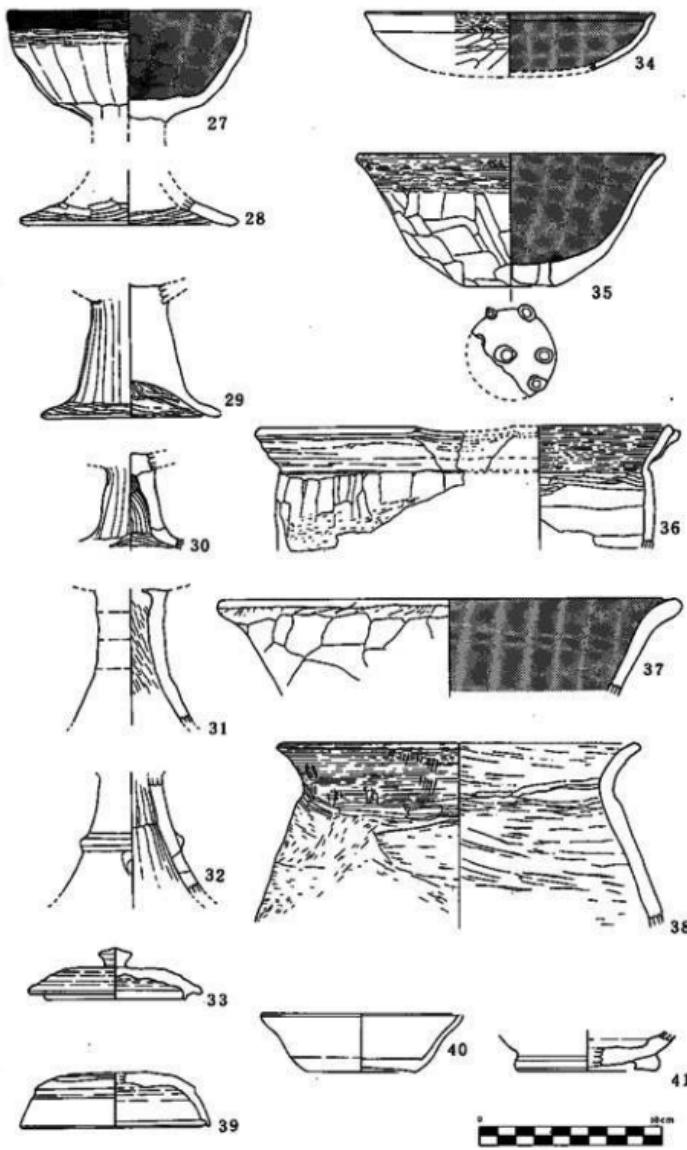
第12図 土器実測図 ( 1~2 - SB01 , 3~5 - SD01 )



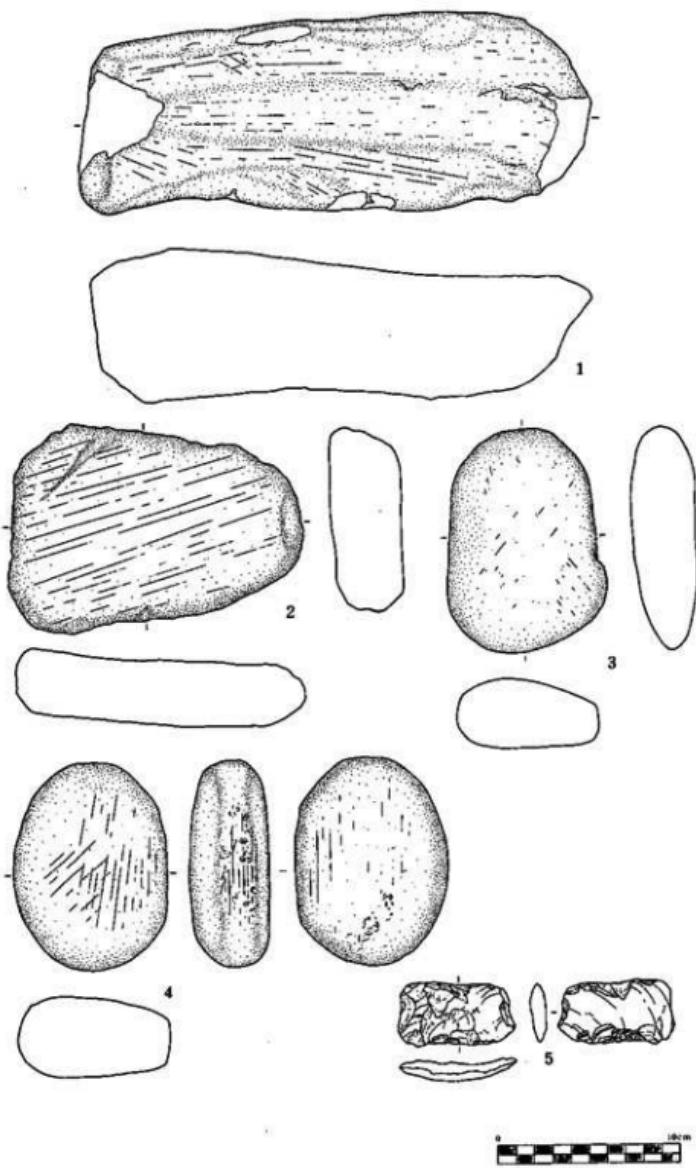
第13図 土器実測図 ( 6 - SD01 、 7 ~ 9 - SD03 、 10 ~ 14 - SD05 )



第14図 土器実測図( 15 ~ 26 - SD05 )



第15図 土器実測図 (27~32—SD05、33—SD06、34—pit2、35・36—pit5、  
37~38—pit81、39~41—その他)



第16図 石器実測図 (1-SD01, 2-SD05, 3-pit16, 4-pit52,  
5-Z-11-27)

## 第5章 概括

上田市街地の東方に位置する神科台（染屋台）は千曲川の形成した第1段丘面であるが、この一帯はまた条里的遺構が広く残存する地域として知られている。昭和47年度から開始された条里遺構調査は、この台地に刻まれた幾多の歴史を明らかにしたが、その一つとして大字古里字東之手および字西之手地籍を中心とした地域に創置の信濃国府が存在したという新しい展開をみるに至ったのである。推定される国府城は、方6町あるいは方8町ともいわれ、かなり広範囲にわたっている。

近年、この地が農業構造改善事業、道路敷設、住宅・工場造成などによる土地開発が急速に進んでおり、地下に眠る遺構の完明を早急にやらねばという気運が盛りあがってきたのである。

今回の発掘調査は、その第1次確認調査というべき性格のもので、まず国府城の南にあたる南門あるいは南大門跡と推定される部分から開始した。なお、遺跡名は推定されている国府城の中心地域とみられる字名をとって、東之手・西之手遺跡と呼ぶことにしたのである。本遺跡から確認された遺構・遺物は前章で述べたとおりであるが、簡単にまとめておきたい。

今次の調査はA地区（東之手地籍） $162\text{m}^2$ 、B地区（西之手地籍） $145\text{m}^2$ 、計 $307\text{m}^2$ 、という比較的狭い範囲の確認であったが、溝状遺構6、土塗状遺構6、柱穴状遺構約70、堅穴住居址1の各遺構とそれに伴う多くの遺物を検出した。

第1号溝状遺構SD01はA・B両地区に接続して確認されたが、A地区中央部に焼土と炭化物が集中した箇所もみられた。しかし、その性格については不明であった。また、B地区に検出された第5号溝状遺構SD05は、その内部に砂質層と大小の河原石が堆積しており、当時は水量のあるかなりの流路であったことが推定できる。しかも、この遺構内からはかなりの遺物が検出されている。

土塗状遺構はA地区にのみ確認されたが、内部からの遺物も少なく、その性格について現段階では不明といわざるを得なかった。また、多くの柱穴状遺構についても、遺構それぞれの規模あるいは配列等からみて、掘立柱建築遺構に伴うものと早急に結論づけることはむずかしく、今後に残された課題である。とくに、B地区のpit81～pit83の柱穴状遺構は、他のピットに比べて大型のものであり、南北に一列のつながりがみられたものの、その他の広がりが追求できず、結局不明といわざるを得なかった。

B地区南西隅にわずかに検出された堅穴住居址SB01は、その全容を把握できなかったのは残念であるが、石組みカマド付近とみられる場所から良好な資料を確認できたことはさいわいであった。

発掘区から検出したこれら各遺構相互の関係についても追求したが明確にできなかった。しかしながら、A地区的SD01と柱穴状遺構との切り合い関係もみられ、後者がより新しい遺構であるとの所見も一部では確認できたのである。

また、検出された遺物についてみると、前述したように小範囲の調査にもかかわらず多くの資料が得られた。これらは土師器が主体で、他に須恵器、灰釉陶器、青磁、石器などがわずかにみられた。

構造遺構 SD01 から検出された土師器壺形土器は、和泉期から鬼高窓前半位に比定される資料として把えることができよう。また、B 地区の SD05 からはかなりの土器資料が検出されたが、鬼高窓前半位とみられる壺、あるいは鬼高窓中頃に比定できる高窓形土器などもある。さらに、SD06 からの須恵器蓋は鬼高末期の 7 世紀代に比定できるものであろう。

B 地区の堅穴住居址 SB01 内出土の長胴甕は鬼高窓終末から真間期（8 世紀）位に比定される資料であり、本住居址の構築もこの頃に推定できよう。

以上が今回の調査の概要であるが、当初予測した門址あるいは道路跡等の遺構の確認はできなかつた。また、検出した遺物のおおざっぱな検討では、国府が存続したと思われる時期より既して古様を示す遺物が多かったのである。しかしながら、今次の調査はほんの一部分のみの追求であつて、むしろこれから調査に期待が寄せられよう。事実、本地域がそれ以前から人々の生活舞台であったことは、それ以後の資料の検出も可能であることを示唆しているのである。今後さらに調査が継続されることを望むのである。

おわりにあたり、本調査に終始ご協力をいただいた地元の皆様をはじめ、関係各位に厚く御礼申し上げる次第である。

図 版



神科村誌刊行会提供

図版一 遺跡・遺構



A・B地区全景  
(西より)



A地区  
遺構検出



B地区  
遺構検出

図版二  
遺構



A地区（西より）



同上（北より）

図版三 遺構・遺物出土状況



B地区（北より）



溝状遺構 SD01（西より）



SD01 出土土器

図版四 遺構・遺物出土状況



溝状遺構 SD05（西より）



堅穴住居址 SB01（南より）

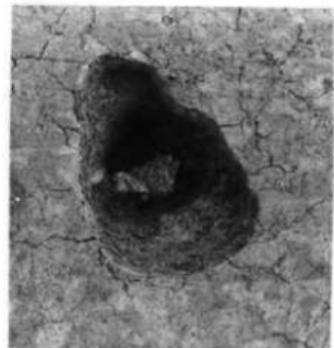
図版五  
遺構



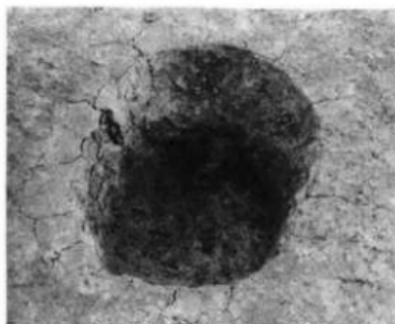
柱穴状遺構 pit 5



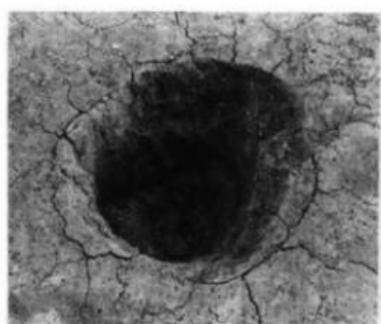
pit 80



pit 81



pit 82



pit 83

図版六

調査風景・調査団



発掘調査スナップ

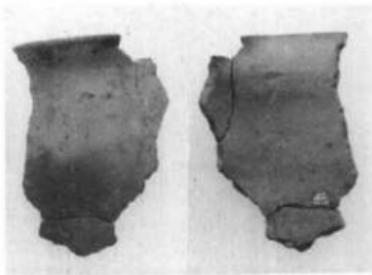


調査参加者

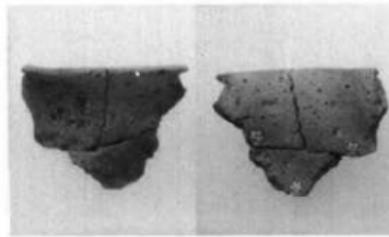
圖版七 出土遺物



1



2



4

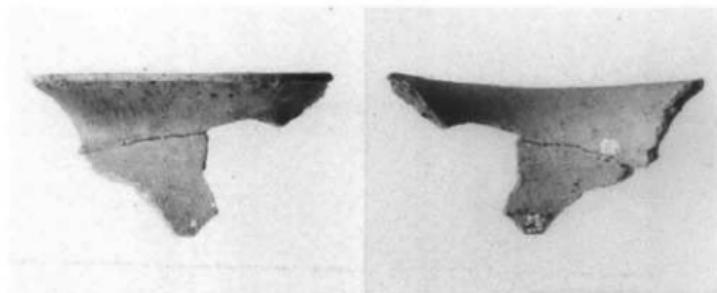


5

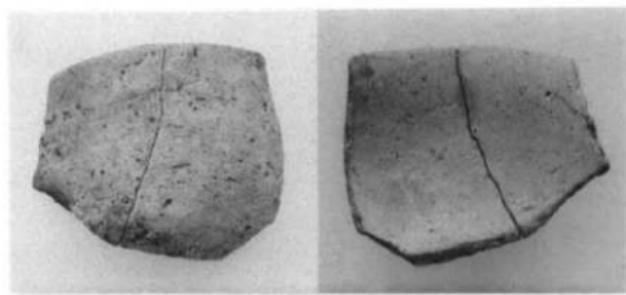


6

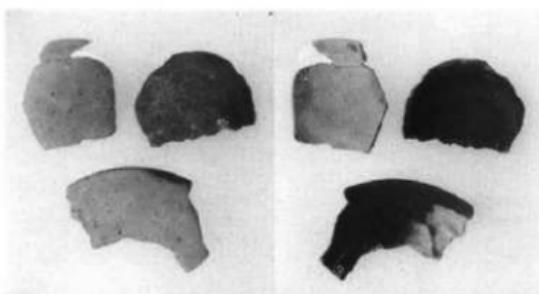
圖版八 出土遺物



7

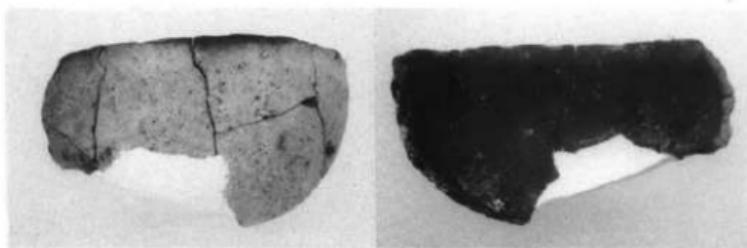


18



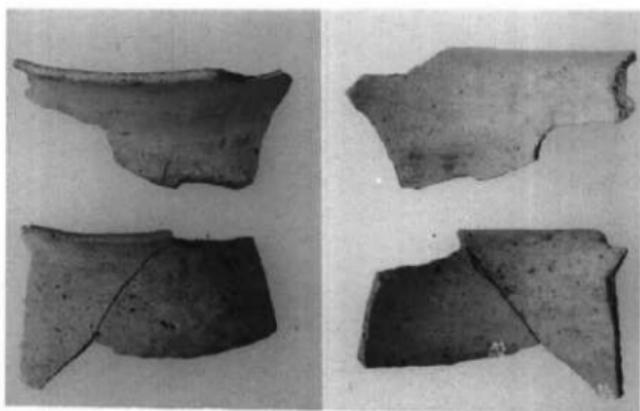
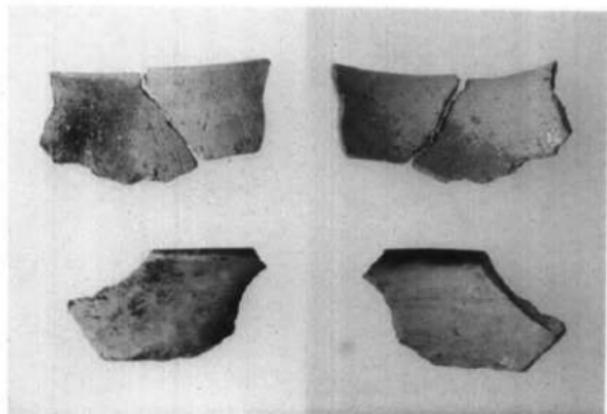
16 13

26



19

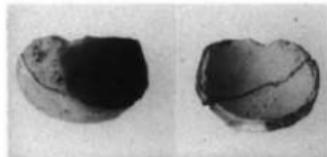
圖版九 出土遺物



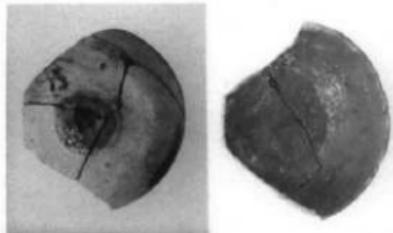
23

24

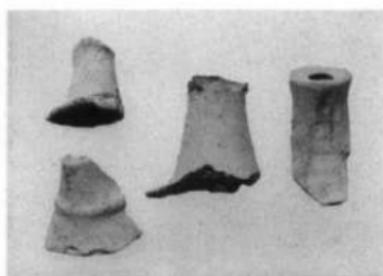
図版十  
出土遺物



25



27

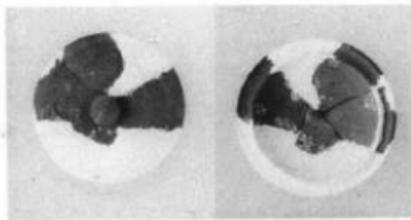
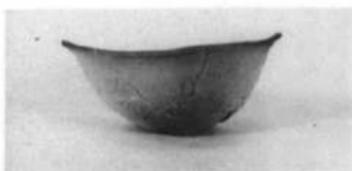


30

29

31

32

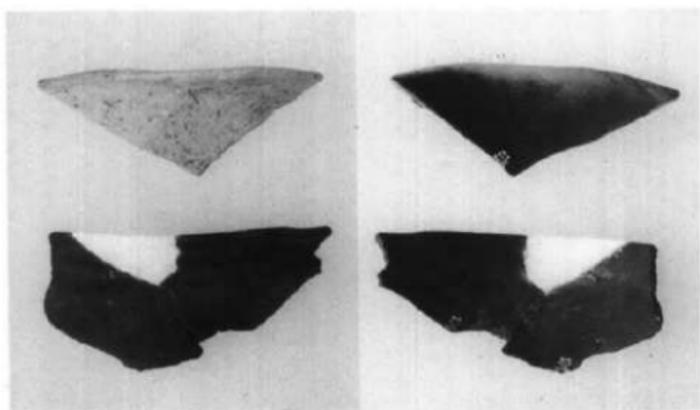


33



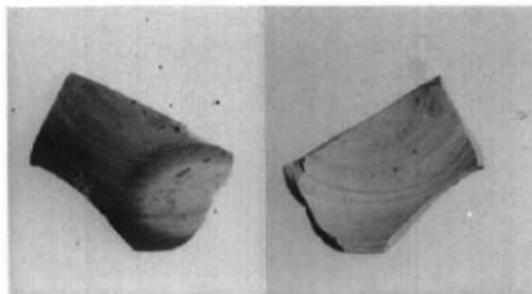
35

圖版十一 出土遺物

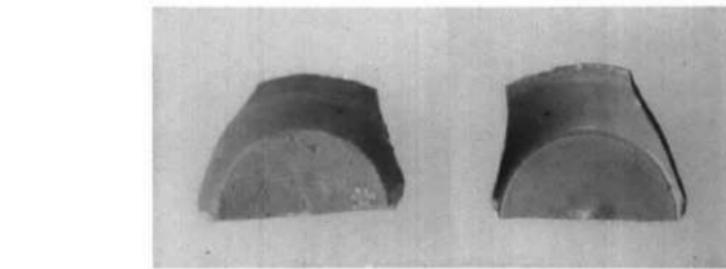


37

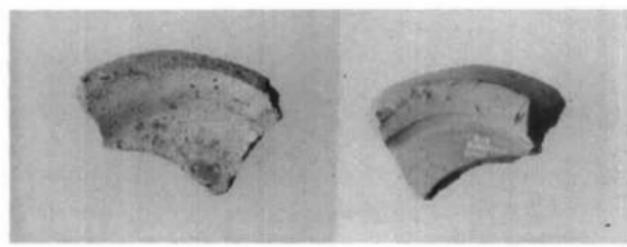
36



39

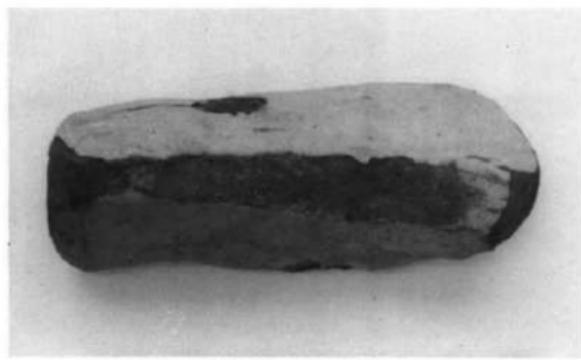


40

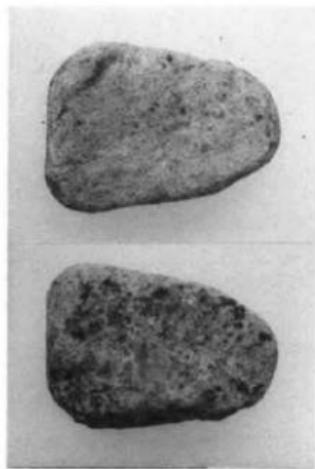


41

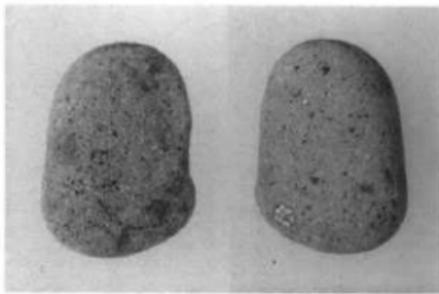
圖版十二 出土遺物



1



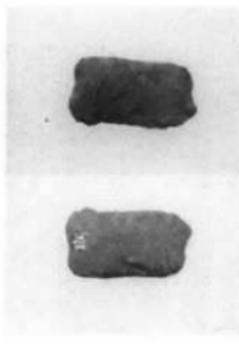
2



3



4



5

上田市文化財調査報告書 第21集

**東之手・西之手遺跡発掘調査概報**

印 刷	1983年3月20日
発 行	1983年3月31日
編 集	信濃國府跡確認調査団
発行者	長野県上田市教育委員会
印刷所	有限会社 伸和印刷

